

学習アドバイザーの学習支援活動に関する考察

—東京経済大学英語学習アドバイザーにおける取り組みを事例として—

関 昭 典

Reflections on the Activities of Study Advisors in Tertiary Education in Japan

—A Case Study of English Study Advisors' Practice in Tokyo Keizai University—

Akinori SEKI

Abstract

For a long time it has been a dominant view among university staff in Japan that it is the students' job to search and find effective study methods and to deepen their knowledge and skills in their respective fields. The professors had strongly believed that the most important role of the educators in tertiary education is to strengthen their expertise and impart it to their students. However, in recent years they have gradually realized that their view is too optimistic. They had found out that a great deal of university students in these days are not equipped with strategies to study autonomously and cannot begin to study until teachers give them specific and detailed directions. What makes things even worse is that they have had to deal with students who have pathetic attitudes towards learning.

Nowadays it has become a dominant view that only teaching in class is not enough to effectively develop students' ability to study. These days, it gets more and more emphasized how important it is to support the students' study "out of class". This has been recognized for nearly 50 years in the US and is only now looked into here in Japan. Study advisors, the main theme of this article, have attracted attention as a staff who will play a central role in supporting students' self-study and who will also function as a bridge between students and teaching staff.

In this article, the history of study advising in the US and Japan will be briefly reviewed. This will be followed by a discussion about the present situation of the study advising system in Japanese universities, taking the activities in Tokyo Keizai

University as an analogy.

The purpose of this article is to develop the English study advisor system in Tokyo Keizai University, which will hopefully lead to be promoted and implemented in universities all over Japan.

1. はじめに

近年多くの大学において、大学教育の質の保証が求められる中で、学生の学習支援に対する様々な取り組みが実施されるようになってきた¹⁾。それらの取り組みの1つとして、学生に対する学習支援という観点から学内に学生の学習相談に応じる学習アドバイザーを設置する大学が増えている。現に「第2回 大学教育力向上に関する調査」²⁾によれば、大学内での学習支援に関する取り組みを何らかの形態で実施する大学は2007年から2010年にかけて増加傾向にあり、各大学においても積極的な取り組みを展開し始めていることが伺える。そして、学習支援に携わる学習アドバイザーのあり方や役割、活動内容も多岐にわたっている³⁾。

一方、多くの大学にて様々な取り組みが実施されそれぞれ一定の成果が見えてきているものの、学習支援における学習アドバイザーの業務については、学習支援そのものの定義が必ずしも関係者内で一致しておらず⁴⁾ 学生からの相談自体は学生の任意であることもあり、利用者が一部の限定された学生に絞られてしまうといった課題も見えている³⁾。

本学においても、2006年から大学内に学生の英語学習に特化した形での学習アドバイザーを設置し、学生の学習相談にのるとともに、学生の自律的な学習を促進するためのプログラムや働きかけを行ってきた。そして、学生の利用者数が年々増加していることや、英語に対する興味関心が増したといった学生からの声からも、一定の成果が出ていることは伺える。しかし、いかにそれを学生の自律的な学習能力の向上や英語力の向上といった教育目標に結びつけていくか、もしくは、そもそもそれらを英語学習アドバイザー制度の目標とすべきなのかなどについて十分な議論が成されていない。即ち、英語学習アドバイザーに求める役割やミッションをどう位置づけるかが必ずしも厳密に定まっていないという課題も見え始めている。

本稿では、本学における英語学習アドバイザーの取り組みを事例として学習アドバイザーの定義と役割、それに付随する業務内容をまとめ、その成果と課題についての考察を行い、今後の英語学習アドバイザーに関わる関係者の目線を整え、英語学習アドバイザー制度をより発展させることを目的としている。

2. 学習支援, 学習アドバイザーとは

2.1 学習支援, 学習アドバイザーの定義

近年学生に対する支援が注目され, 多くの大学で取り組みが重視されてきている背景には, 18歳人口の減少に起因する大学競争の激化や学部教養教育の見直しに伴った初年時教育やキャリア支援など, 伝統的には大学に存在しなかった機能の必要性が高まってきたことに起因することが指摘されている⁵⁾。いまだ日本においては, 学習支援は発展途上の段階にあり, その原因として大学教育における学習支援の位置づけや概念が曖昧であること, 実践的取り組みを普遍化し共有化するためのシステムが脆弱であること等が挙げられている⁴⁾。そのような中で学習支援に関しては, 米国における取り組みに注目が集まることが多く, 多くの文献にて学習支援の目的や定義に関する記述を見ることができる。理由としては, 米国においての学習支援の取り組み自体は, 1960年頃から急速に発展しており, システムや組織体制, 人的資源など様々な部分において既に充実した機能を備えているためでもある⁴⁾。米国においては, 学生に対する様々な支援をアカデミックアドバイジングとして取り上げ, 学習支援を包含するものとして位置付けている。

米国におけるアカデミックアドバイジングは学習支援と密接に関わるものであり, その目的は, いくつかの文献に掲げられている。例えばユネスコの情報⁶⁾によると Table 1にあるように8つの目的, 機能が具体的に挙げられている。

Table 1

1	学生が, 人生の目標と一致する教育計画を発展させることを助ける
2	学生のアカデミックな進歩と学位要件について, 的確な情報を提供する
3	学生がアカデミックなポリシーと手順について理解するのを助ける
4	学生がアカデミックに成功する能力を高めるため, キャンパスの資源にアクセスするのを助ける
5	学生が教育的な, または個人的な問題を克服するのを助ける
6	学生のアカデミックな到達や, (アドバイジングによる) 適切な介入を発展させることを阻害するシステムや個人の状態を特定する
7	学生の教育に関わるニーズ, パフォーマンス, アスピレーションや諸問題について有効なデータを検討, 使用する
8	学生のニーズや要望に応じて, 学生とコンタクトをとることにより, リテンション率を高め, 学生を大学につなぎとめる

他にも米国には, アカデミックアドバイジングに関する専門職団体として, NACADA (National Academic Advising Association) があり, ここでのミッションと戦略的目標は, Table 2の通りである⁷⁾。ここでいうアカデミックアドバイザーとはアカデミックアドバイジングを担当する者のことであり, 学習アドバイザーとは役割を異にするものである。

Table 2

-
- 1 高等教育におけるアカデミックアドバイジングのニーズにグローバルな観点で取り組む
 - 2 アカデミックアドバイジングの一連の知識を発展させる
 - 3 多様な世界での学生の学習活動の成功、発展を推進するために、アカデミックアドバイザーの教育的な役割を擁護する
 - 4 大学の意思決定者に、高等教育におけるアカデミックアドバイジングの質、役割について教える
 - 5 NACADAの有効性を保証する
-

清水によると NACADA は、アカデミックアドバイジングの概念をなす3つの要素として、カリキュラム、教授法、学習成果を挙げている。まず、カリキュラムには、大学のミッション、文化・期待、正課カリキュラムと正課外活動の意味や価値及び関係性、思考様式、学習、意思決定、学習プログラムやコースの選択、人生設計、キャリア目的の向上、学内施設整備、大学の方針や履修手続、知識や技能の伝達が含まれる。第二に、アカデミックアドバイジングは、学生の教育と学習にも関わることであるから、その教授法には、準備や助成、専門知識の収集、助言の相互作用の評価が含まれるものとされている。また各教育機関により、その個別方策、戦略や技術は多様であるが、アカデミックアドバイジング担当者と学生との良好な関係が基本となっており、互いに尊重、信用し、倫理的に行動することが不可欠となっている。第三に、アカデミックアドバイジングによる学生の学習成果は、大学のミッション、アカデミックアドバイジングのミッション、カリキュラム、および正課外活動によって導かれるものとされる⁸⁾。本稿では、アカデミックアドバイジングの定義を「学習のサポートも含めた、もっとも包括的な意味での学生支援、学習支援を含む。他に履修選択や、奨学金獲得の支援、キャリアサポートなども含めるもの」とし、主に米国での制度だが、日本の大学における同様の制度に言及する時はアカデミックアドバイジングとした。

日本においては、学習支援の定義を「高等教育機関において、学生が教育課程を効果的に遂行するために整備された総合的な支援体制。履修指導や学生相談、助言体制の整備など」としており⁹⁾ 一方、米国においては、Boylanによると、学習支援が関わる領域として①学位プログラム、研修機関、専門職のための会議、②実践のための高い基準を奨励するための専門職団体、③認可目的のための同僚評価システム、④専門分野の出版物、⑤基本的な知識の確立と実践改善のための研究機能、とある¹⁰⁾。本稿においては、他の用語との定義の区別をするために、学習支援の定義を「アカデミックアドバイジングに包含される学生に対する主に学習についての支援」と定義した。したがって、学習アドバイザーとは、必然的に主に学習についての支援を行うアドバイザーのことを示し、本学で運営されている学習アドバイザーとは、アカデミックアドバイジングの中に含まれる学習支援であり、さらに学習支援の中でも英語に特化した学習支援を行う者として議論を進めることとする。

2.2 学習アドバイザーの活動

まず学習支援を包含するアカデミックアドバイザーの活動に焦点をあてて見ていく。ユネスコは、アカデミックアドバイザーの活動を、Table 3の通り9つの活動に大きく分類しており⁶⁾、学習にとどまらない様々な支援を学生に対して行っていることが伺える。学習支援とは、これらの中でも学習に関わる学生への支援のことを指す。

Table 3

-
- | | |
|---|---|
| 1 | 意思決定とキャリア決定について学生をサポートすること |
| 2 | 大学の組織的な要件を理解し、対処することを支援すること |
| 3 | 大学の組織的な方針や手続き、内容について明確な情報を提供すること |
| 4 | 講義の選択や教育的な経験について学生を支援すること |
| 5 | 講義内外で適切な資源を提供すること |
| 6 | 到達目標に対する学生の到達度を評価すること |
| 7 | 大学の意思決定や方針策定、手続きを改訂する際に用いる学生のニーズや好み、成果に関わるデータを収集、共有すること |
| 8 | 学生のキャリア選択に関わる情報を学生に提供する際に彼らの様々な興味、能力に関わる尺度を吟味すること |
| 9 | 助言に関わる情報を提供するオンラインでのソフトウェア含めたサービスを活用すること |
-

日本における学習支援を行う学習アドバイザーのあり方として、例えば、学習アドバイザーを大学院生が担当し、図書館や専門組織内で英語等の一般的な学習内容に関する学習相談の対応を行う大学もあれば、学習アドバイザーを大学内の教員が担当し、通常の講義以外に特定の時間を設け、その時間内に講義内容や学習内容に関する相談を受ける手法をとる大学もある。他には、学内に専門機関を設け、大学独自で業務を遂行するケースや学習アドバイザーを外部に委託する大学もある。本学においては学外機関にアドバイザー業務を委託し、そこから派遣されるスタッフが学内で学生の学習相談に対応する形態をとっている³⁾。

アカデミックアドバイザーの評価法としては、米国においては多様な取り組みについて、それぞれ具体的な評価項目を設け、それを経年的に分析する仕組みがあるが、日本においては、その段階に達しているとは言い難い。参考までに清水が作成した米国の13大学におけるアカデミックアドバイザー（清水の表記は「学習助言」）に関わる目標とそれに紐づいた評価項目一覧を記載する⁸⁾が、ミッションから導きだされた目標とそれに基づく評価項目が明文化され、それを評価できる仕組みが既に構築されていることが伺える。本来であれば、こうしたアカデミックアドバイザーに関わる評価項目、さらにそれに紐づく学習支援の評価項目、そして学習アドバイザーに関わる評価項目が日本の大学教育においても策定されることが望ましいことは言うまでもない。

Table 4

<p>学習助言の9つの目標</p>	<p>適切な教育的計画を進展する キャリア・人生目標を明確にする 適切なコースと他の教育経験を選択する 大学の卒業要件を説明する 学位取得に対する学生の取組を評価する 学生の学習を向上させるために利用可能な施設設備の情報提供をする 意思決定能力を向上させる 学生を自立した学習者とする 学生の教育ニーズ、経歴、これらのデータがどのように制度上の決定と制作に影響し得るかデータを収集する</p>
<p>学習助言担当者(評価対象者)</p>	<p>学習助言の満足度 学生への対応 学習助言担当者に対する満足度 連絡のとりやすさ 学生の話を注意深く聞く 学習助言の内容 学生の学習目標 選考選択 / コース選択 キャリア / 進路選択 卒業 / 履修要件 学生による決定の援助 学生の学習状況の把握 学内の手続き等 正課外活動等 学習助言担当者に求められる知識 学内施設設備、卒業要件等に関する知識 他部署等との連携 十分な学習助言の時間 学習助言のための事前準備 学習助言について学生への事前説明実施 学習助言担当者の能力・質向上についての意見 学習助言に関する評価</p>
<p>学生(評価対象者)</p>	<p>学習助言に対する満足度 学習助言の内容 学習助言後の内容理解 学習助言を受けるにあたっての事前準備 面会の予約と履行</p>

3. 東京経済大学における取り組み

3.1 英語学習アドバイザー導入の背景、役割

東京経済大学においては、2006年より英語の学習支援に特化した学習アドバイザーを設置しているが、元々の役割は、大学内に英語関連のeラーニングを導入するに伴い、そのeラーニングの活用を含めて学生の自律的な学習を促進することを目的に設置されたものである。当初は「英語eラーニング課題学習」における学生の学習状態を把握し、学生の自律的な学習を支援し、また「課題学習」の学習履歴を管理し、さらに通常のeラーニング・クラスで使用する教材の印刷・配布などの教員の補助作業を担当することが主な役割であった。しかし、その後現在に至るまで、年を追うごとに英語学習に関する相談業務の比重が増してきており、現在では講義外における英語学習への対応が主な相談業務となっている。それに加えて英語講義内で利用されるeラーニングの操作方法や活用方法に関する相談対応を行う存在として、学生からの相談を受けつけているというのが実態である。

3.2 英語学習アドバイザーの活動概要

英語学習アドバイザーの当初の活動としては、英語に関わるeラーニングの活用支援といった位置づけが強かったということもあり、①学生の出席管理、②課題学習時限における教室巡回、③課題学習時限内における学生の質問（eラーニングおよびパソコン操作に関するもの）への対応、④学生の学習履歴（ログ）の管理、⑤学生の学習履歴の印刷と教員への配布、⑥統一教材・小テストなどの印刷と配布等の業務が主たる業務となっていた。しかしその位置づけが英語学習相談全般に関わる位置づけへと移行して行く中で、英語学習相談に關しての働きかけに該当する、⑦英語eラーニングの学習に関するアドバイスや英語学習一般に関するアドバイス、英語学習支援・関心喚起のためのミニ講座のような業務も含まれることになった。その結果、学生の英語学習に関わる意欲の喚起から、英語学習の促進、相談等に至る幅広い業務までを担当することが求められた。

活動概要としては、外部機関に委託し、常時1名の学習アドバイザーが学内に滞在し、月曜日から金曜日までは午前と午後、土曜日は午前中のみ学習相談に応じている。午前中は主に正課科目である「英語eラーニング」の授業が行われる教室に隣接する部屋に常駐し、英語講義や英語講義で利用するeラーニングの内容を含めて相談に応じている。一方、午後は本学学生の学習支援を目的に2007年度に設置された「学習センター」に常駐し、講義と直接は関係のない、より一般的な英語学習の相談を中心に対応する形となっている。

具体的に英語学習アドバイザーの活動内容をまとめると、下記Table 5のようになる。

Table 5

1 英語学習に関わる学習支援活動	英語学習に関わる学習相談 ランチタイムミニ講座の実施 ニューズレター作成, 配信
2 eラーニングの活用に関わる相談対応	「eラーニング」担当教員への各種連絡 「eラーニング」受講学生からの相談 PC教室の開錠, 施錠

つまり、現在では主に英語学習支援に比重を置きつつ、それに加えてeラーニングの活用支援、事務的な手続きといった複数の業務を担っていることがわかる。またeラーニングについても、特定のeラーニングソフトウェアに関する相談対応という位置づけから、英語に関わるeラーニング全てに関わる相談に対応するという位置づけに移行してきている中で、対応するソフトウェアやツールの種類も増加しており、その対応の範囲は広がりを見せている。

3.3 英語学習アドバイザーの利用推移

英語学習アドバイザーの利用者の推移は、年々増加傾向にあり、Figure 1にある通り2007年度は年間で700件程度の相談件数があり、2008年度で一旦減少したものの2009年度には1,000件を超えており、学生の認知度が向上するのに伴い、利用者数が増加している。

毎月の利用者の推移を見てみると、4月は入学月となるため、利用者数は通年と比較する時とさほど多くはない。英語学習アドバイザーに最も関連の深い「英語eラーニング」は「3学部（経済学部、経営学部、現代法学部）英語プログラム」の大学1年生対象の必修講義であり、年度の始めである4月の講義開始時点で宣伝活動を行うことにより、次第に相談来訪者が増えるという傾向がある。実際4月～7月にかけて、利用者数は毎月増加している。また7月は、「3学部英語プログラム」の学生はTOEICの受験が義務付けられていることもあり、利用者数が増える月となっている。その後8月から9月下旬までは夏季休業中につき、相談業務も休止する。後期に入ると、10月以降に実施されるTOEICの試験に向けて、学生は7月のスコアを意識しつつ、準備を行う学生が多くなるため利用者数は増加傾向を示す。

利用者の初訪のきっかけとしては、Figure 2に示す通りである。学生同士の口コミが訪問のきっかけとなっている場合が多いが、その他にも教員からの声かけによる訪問が高い値を示している。実際、相談内容の中には大学内の英語の講義に関わるものが多く、英語の講義を担当する教員が授業内で英語学習アドバイザーの存在を周知し、訪問を促していることが推察される。また、学生の認知度を高め、英語学習への興味・関心を惹きつけるためのイベントを毎月実施しており、その具体例としては、定期的なTOEICの準備対策講座、映画の上映会などが挙げられる。

Figure 1

月別相談件数（年度比較）

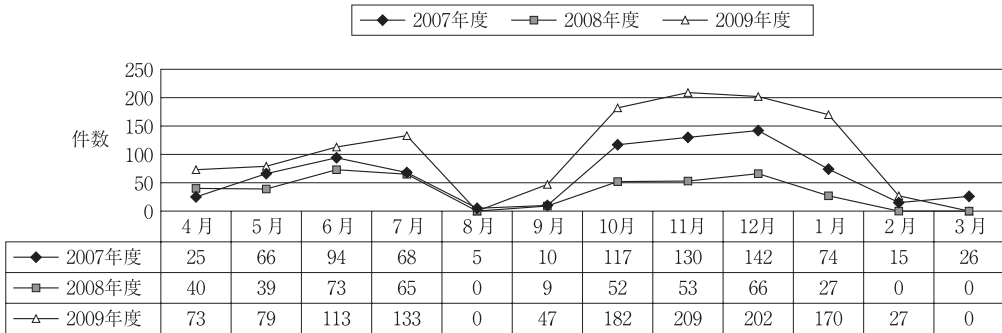
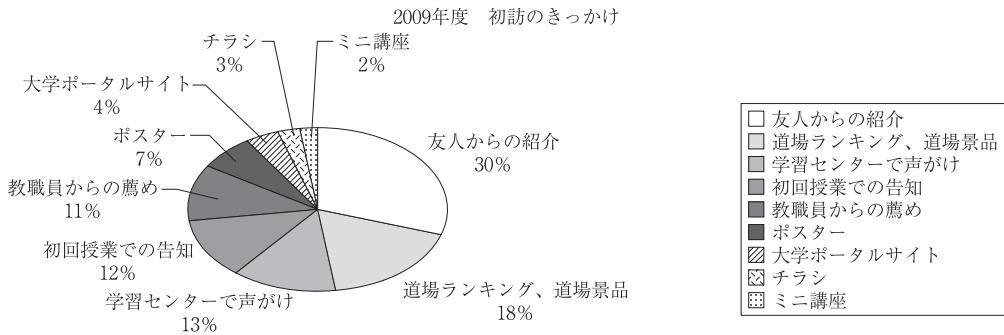


Figure 2

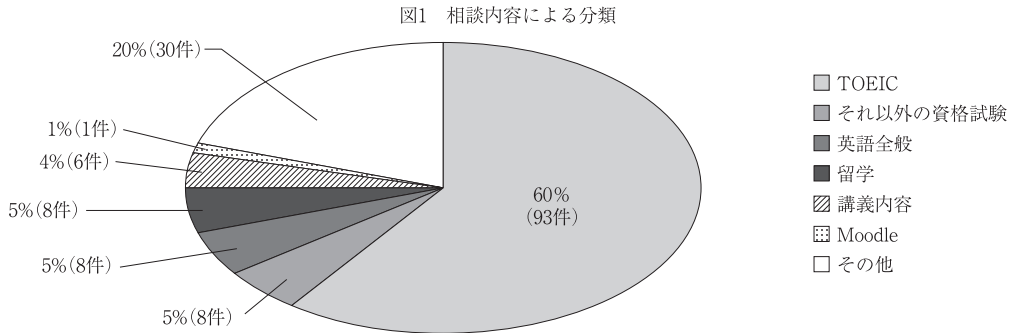


3.4 学習アドバイザーの相談内容及び評価

東京経済大学の英語学習アドバイザーは、英語学習に関する相談への対応、およびeラーニングに関わる活用支援をすることが主な役割となっている。その役割と実際の相談内容とが合致しているかを調べるため、英語学習アドバイザーの活動期間である2010年4月から6月にかけて学生からの相談内容を午前のみ相談内容別に集計し、それを各相談内容毎に区分した。結果としてはFigure 3に表示される通りとなった。TOEIC試験が7月に実施されるということから、TOEIC試験に対する相談内容が最も多い相談事項となっている。そして留学についての相談やTOEFLを含めその他の資格試験の相談等が次に続く。その他にもeラーニングやPCリテラシーに関わる相談も確認されている。ただしここで注目したいのが、その他の項目が多いことである。具体的には、英語以外のキャリアの相談や講義の履修に関わる相談等、前段で掲げられている役割に必ずしも一致しない相談内容が少なくない。本学ではキャリアサポートセンター、学生相談室、学習センター、各学部など様々な部署で学生への支援を積極的に行っているが、各々の機関が独立して業務に取り組んでおり連携が十分でないために、学生に混乱をもたらしていることが、本資料等より推測される。

また英語学習アドバイザーの評価方法に関してであるが、英語学習アドバイザーの存在が

Figure 3



即ち学生の英語力向上に直接的に結びつくとは考えにくく、そのため TOEIC などの数値尺度での評価は適切とはいえない。そこで、現状では利用人数や学生の満足度（面接法による評価）といったものが主たる評価の指標となっているが、今後は加えてアドバイザールームを利用した学生の英語の成績を調査し、定性的な研究を行うことにより、評価項目の幅を広げていく必要がある。現在の英語学習アドバイザーの役割は多岐にわたっており、それら 1 つ 1 つの役割について客観的に評価を行うまでには至っていないという現状があり、改善が期待される。

4. おわりに

本稿では東京経済大学の英語学習アドバイザーの取り組みを通して、学習アドバイザーの役割と定義、その活動内容を見てきたが、英語学習アドバイザーの利用という観点では、経年的に人数が増加しており一定の成果を示していると判断できる。その一方で、利用者を相談内容で分けた場合には、必ずしも英語学習アドバイザー自身の考えるアドバイザーの定義や役割に合わないものも少なくない。加えて、そもそも英語学習アドバイザーの定義や役割についての学内での共通認識が十分に得られていないこともあり、相談業務にネガティブな影響があることも否定できない。その理由としては、英語学習アドバイザーの役割そのものが開始当初から経年的に変化してきていること、およびその役割の変化が学内の担当者を超えてなかなか共有されておらず、関係者内において英語学習アドバイザーに求める役割や業務内容にばらつきがあることが挙げられる。

今後は、小貫（2009）も指摘している通り、学習支援のような正規課程に密接に結びついている職務においては、どのような人材を配置することが適切なのか真剣に考えていく必要がある。教育的活動においても、中心的な部分、周辺領域的な部分との整理が必要であることが示唆される¹¹⁾。東京経済大学においても、英語という大学内の講義と密接に関わる領域においては、学習支援の領域で対応すべき範囲をしっかりと整理することが求められてい

ると言えよう。そのことを考慮せずに学習支援が導入されると、いつまでも教員の個人努力に依存した学習支援活動から脱却できず、先の段階に進むことは困難である。さらには学習支援という領域を支える学外の団体の存在を改めて見直す必要性があり、所属機関を超えた結びつきの中で、いかに学習支援活動を発展していけるのか真剣に議論していく必要がある11)。

英語学習アドバイザーにおいても、外部機関より派遣されたスタッフが英語学習相談を担当しているが、その機関の専門家と大学関係者との意見交換や情報共有等含めて発展していくことが望ましいと考えられる。ただし教育現場では即断実行を求められることも少なくない。外部機関に学習アドバイザーの派遣を依頼する場合には、契約の内容によっては業務に必要な施策を講ずる際に、その都度派遣元の機関と協議をしなければならない。2007年から2009年にかけて、本学においてこの点で混乱が生じる事例が少なからず生じていた。この問題を解決するためには、2010年度のように学習アドバイザー業務に関する知識を十分に要し、かつ大学側からの要望に即座に対応できる人員を委託機関に配置してもらうことが重要となる。また、外部機関に学習アドバイザーを業務委託する場合には、大学の根幹を成す教育内容に関する詳細な情報や学生の個人情報等を委託機関に開示することになる。したがって、大学と委託機関での適切な連携が必要となると同時に、情報の開示方法について大学の担当者間での共通認識が必要となる。非常勤講師依存率の高い本学3学部英語プログラムにおいては、特にこの点は重要となる。また学外機関に頼らず、大学独自で英語学習アドバイザーを雇用、運営し、経年的に発展させていくことも一案であろう。

CASにおいても、その冒頭で、「アカデミックアドバイザーはそのミッションの中に、学生の学習と成長を組み入れなければならない。そして、そのミッション・目的を開発、記録、普及、実行し、定期的に再検討しなければならない。当該教育機関のミッションの記述は、この文書の規準に一致したものとなっていなければならない」との規範を示している⁸⁾。そこで、まずは学習アドバイザーとしてのミッションを明確にし、彼らが何のために存在するのかを明確にした上で業務内容を整理し、それに付随する評価項目を設定し、改善を行っていくことが重要であろう。その点では、東京経済大学においてはまだ英語学習アドバイザーの歴史が浅いことも鑑み、英語学習アドバイザー自体のミッションをまず明確にし、役割を整理することが何よりも肝心であろう。その上で英語学習アドバイザーの各業務を整理し、その業務に基づき、各評価項目を設定し、経年的に評価を見ていくことで、学生にとってより有益な存在として発展していくであろう。

謝辞

これまで、本学の英語学習アドバイザー制度に真摯にご対応くださり、本稿執筆に当たっても資料を提供して下さったベネッセコーポレーション及びアルク教育社の皆様に感謝申し上げます。

学習アドバイザーの学習支援活動に関する考察

さらに本稿は、東京経済大学の個人研究助成費 A による支援を受けていることも申し述べておきます。

参 考 文 献

- 1) 文部科学省。「第3人口減少期における我が国の大学の全体像」(2010)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1297013.htm
(accessed 2010. 09. 29)
- 2) 社団法人日本能率協会 学校経営支援センター。(2010)「第2回 大学教育力向上に関する調査」結果の発表(速報)」
http://www.jma.or.jp/news/cms/upload/release/release20100903_f00110.pdf (accessed 2010. 09. 29)
- 3) 株式会社野村総合研究所。(2005)「大学の教育力の向上に関する調査(アドバイザー制度の実態調査)報告書」
<http://monobiz.jp/img.html?img=544384&mime=application/pdf> (accessed 2010. 09. 29)
- 4) 小貫有紀子(2005)「アメリカ高等教育における学習支援プログラムの基準と評価システム」.
大学教育学会誌 27 (2): 81-87
- 5) 小貫有紀子(2009)「学生支援の組織と業務の役割分担に関する一考察」. RIHE 105: 24-36
- 6) United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (2002) *The role of student affairs and services in higher education*: 25-26
- 7) NACADA About NACADA (2010) <http://www.nacada.ksu.edu/AboutNACADA/index.htm>
(accessed 2010. 09. 29)
- 8) 清水栄子(2009)「大学における学習助言活動の「評価」の重要性について—アメリカ13大学の学習助言(Academic Advising)プログラム評価を手がかりにして—」. 大学教育学会誌 31: 140-148
- 9) 独立行政法人大学評価・学位授与機構(2009) 高等教育質保証関係用語集
- 10) Boylan, Hunter (1997) "Learning Assistance and Developmental Education", *Proceedings of the 13th and 14th Annual Institutes for Learning Assistance Professionals*, University Learning Center, University of Arizona, 12-19
- 11) 小貫有紀子(2005)「米国大学における学習支援職員の発展についての研究—ユニバーサル段階における職務の専門職分化—」. 大学行政管理学会誌 9: 23-28